

再会



大谷藤子

中央公論社

再 会

●検印廃止
一九七〇

定価五八〇円

昭和四十五年十二月十日印刷
昭和四十五年十二月二十日発行

著 者 大谷 藤子

発行者 山越 豊

印刷 三陽社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一

振替東京三四

目次

最後の客

3

再会

59

流雲

103

妻の戒名

143

地の苔

183

あとがき

216

裴
幘
朝
倉
撰

最後の客

1

その晩、私は黒瀬とつれだつて古い板塀にそつて歩いて行つた。明るい街の燈を避けるようにして、私たちは板塀の朽ちた暗さに吸いよせられているのだった。塀ごしに夜の闇があった。そこから樹木が、闇のいろで夜空に聳えていた。黒瀬と私は、秀二が殺人事件の容疑者になつてから、いつもこそそこなところを歩くようになっていた。

私は板塀の朽ちた微かな匂いが、心を鎮める匂いのような気がした。私はふと、塀の中は墓地かも知れないと思つた。すると墓石や塔婆が、闇の底にしんと静まりかえっている光景が眼に浮んだ。その想像は私の心を慰めた。その光景の中でなら、秀二の事件のために私はそれほど苦しまないでもよい気がするのだった。

しかしすぐ不快な、軋むような心の疼痛が打ち返してきた。どうしてこの塀の中は墓地だ

などと思つたりするのだろう。ほんの瞬間だけでも事件の渦中にいることを忘れ、忘れたことを罰せられでもするように、前よりも苦い思いがもどってくるのだ。それは心が軋むような不快な気持で我に返るのだった。

秀二の父親である黒瀬と叔母の私は、事件がおこってから、みじめに周章狼狽しているのだった。秀二がそんなことをするはずがないと二人は幾度となく言いあい、黒白のけじめがつくまではじっとしていられないのだ。もちろん最初の驚愕のときは、秀二を信じこんでいたのだが、それが少しずつ崩されてきているのを黒瀬も私も気づいている。次第に深淵へのめりこんで行くような気持だった。二人はそれを口に出して言ったことはない。言つたとすれば、秀二を白だと強調しているときだった。その語気の強さが、強いあまりに自信のなさからきている感じがするのである。そんなとき黒瀬はひどく昂奮し、一度など発作でもおこしそうなほどだった。

「牧さんは、白だと言っている。白だとも。そんなことは、わかりきつたこつた。秀二は濡れ衣をきせられているのですよ」

黒瀬は不意に、いきりたつように言つた。

私たちは、秀二のために頼んだ弁護士の牧氏といっしょに食事をし、別れてきたところだった。

「牧さんは秀二に会って、ほんとうのことを聞いた。そして容疑はすぐ晴らしてやれると確信をもった。その確信ってやつが大事なんで、ああ、ありがたい。起訴になっても、公判のときに引っくりかえせばよいと、あんなに自信満々だった。牧さんが事件を樂觀しているの、鬼の首でもとったような気持でしたよ。……え、そうでしたね？ おかげでわたしは、胸のつかえが下りたってわけです」

私は黒瀬を疑わしげに見た。黒瀬は才智がつくりだす策略がなく、その真面目さは鈍感からきているかと思われるときがあった。そのくせ彼は、いっこく者で怒りっぽい男なのだ。秀二の事件で仰天し、それから奇妙な熱気のようなものが全身に充満して、うわずっているようにみえた。ときどき頭すじから耳へかけて赤くなるのだが、自分をおさえて感情を爆発させまいとするのだった。

私は黒瀬の少し禿げあがった額を眺め、食事中に牧氏の言った言葉を思い浮べた。ほんとうに黒瀬は、それほど甘く考えているのだろうか。樂觀だの確信だのと、ホクホクしている

ような口ぶりだが、本心からなのだろうか。そのとき仄明るい中で黒瀬は、額だけ妙にはつきりと浮びあがって見え、私はいらいらした。

前日に牧氏から電話があつて、黒瀬と私に重大な報告があるからとのことだったので、私たちは落ちあつたのである。中華料理店の奥まつた小部屋、牧氏はきらめくような小さな眼で、じつとしていても絶えず身動きをしているような感じ、いまにも飛びたつ猛禽類を思わせるような男だった。私は牧氏の眼が妙に不安だった。その小さな眼は自分の内心を悟らせずに、相手の心を読みとるためにきらめいているようだった。黒瀬は卑屈に哀れっぽく、牧氏に事件を依頼したので救われたとか大船に乗った気がするなどと言った。牧氏は返事の代りに唇の隅をひきつらせるようにし、にやりと笑うのである。

報告というのは、秀二に面会し、弁護士として話しあつたので、その模様を私たちに知らせることだった。警察に拘留中の秀二は取調べがすむまで一切面会禁止だが、依頼した弁護士には面会できるのだと牧氏は言い、黒瀬を有難がらせた。

「これは白ですな。当人の話を聞いて、わたしはそう思った。しかし、それを証明することが出来ない。その晩、東京の叔母さんの家を出てこの街へ帰ってくると、駅前から始めてほ

うぼろを飲み歩いた。当人は嬉しいことがあったので飲んだと言っているが、わたしに数えてみただけでも四軒はあるから、マダムの飲屋へ辿りついたときは相当に酔っぱらっていたらしい。覚えがないほど酔っぱらっていたというから、思い出せ、君の一大事じゃないかと言った。別れたのは、何時でした？」

私は十一時だったと答えた。私はその時刻を幾度となく人々から質問されてきたので、いまでは十一時というのは時刻の中で特別な重い響きをもち、不吉な忌わしい思いがするのだ。それはさっと暗く閃き、私の心にきりこんでくる時刻なのだ。

「この街まで東京から電車で一時間、十二時には着いていたわけだ。マダムの店へ行ったのが午前二時ごろだった。その前に帰ればよかったものを、運わるく、マダムが網をはっていのへ引っかかったってわけですな。わたしたちは、白だと立証できるものを急いで見つけ出さなければならん」

事件のあった晩、秀二は東京の私の家へ訪ねてきた。彼はこの街の片山電設会社、電設工事を請負う会社の住込み工員だったが、工事場で責任のある立場に抜擢されたと言い、その喜びを私に伝えたくて出かけてきたのだった。二十三歳の秀二は嬉しさがこみあげてくるの

で、なんでもないことに笑い出したりした。私は彼の帰りを駅まで見送り、若々しい後姿が弾むような足どりで人混みをすりぬけ、消えて行くのを見た。得意さがその若い肩のあたりに現れ、いつもより目立つほど敏捷だった。秀二の喜びは私に伝わり、私はうきうきしながら駅から引き返した。

そのとき駅の時計が十一時であつた。新聞記事によると、その晩、午前二時ごろ、秀二が住み込んでいる工員寮の近くのもと赤線だつたところで、酔っぱらつた若い男が飲屋にはいり、もう看板だと断られた。その飲屋には赤い寝衣をきたマダムが客引きにきていて、自分の店で飲ませてあげると若い男を誘い、いっしょに立ち去つた。マダムの話しぶりで若い男は初めての客だとわかつた。東北生まれのマダムは夜の女で三十五歳、表向きは飲屋をやっているように見せかけている。翌日、夕方になつてもマダムの店は戸締めのままで、彼女は絞殺されているのを発見されたのだった。

黒瀬は新聞の切り抜きを急いで取り出し、牧氏の前へそつと差し出した。私は黒瀬が新聞の切り抜きをいつも持ち歩いているかと思つたほど、秀二の事件のことを話しあうとき急いで取り出すのだった。彼は自分の口から言いたくないことを、それで間に合わせようとして

いた。その切り抜きは、私の最初の驚愕だった新聞記事から始めて、次ぎつぎと報道された各新聞の記事が集められていた。警察ではマダムとつれだつて行つた若い男を最後の客とみて有力な容疑者として捜査中だという記事、それには若い男の服装や人相が出ていたが、その服装は私の家へ訪ねてきた秀二の服装であつた。それこそ私の最初の驚愕だったのだ。そして容疑者の服毒から逮捕までの記事の切り抜き、わずか四、五行のものもあつて指の間に見えなくなるほどの紙片には、黒瀬は丹念に厚い紙の裏打ちをしていた。

「それだけのことで最後の客ときめるのは、どうかしているな。初めて会つた女に、そんなことをするとは考えられないことだ。指紋なんぞ、その店へ行つた以上は残っているのが当然ですからな。わたしは、白の線で押して行くつもりですよ」

と牧氏は言つた。

牧氏は新聞の切り抜きには興味がないらしく、ぞんざいに一枚か二枚ざつと眼を通し、黒瀬のほうへ押しやつた。私は黒瀬が、いかにも重大なものを扱うように微かに指先を震わせ、切り抜きをしまいこむのを見て、恥ずかしさと惨めさを感じた。その一枚一枚は、黒瀬と私を打ちのめしてきたのだ。

「こちらで調査したところでは、マダムは煮ても焼いても食えないような女だったな。勘定を払えない客からは、着物を剥ぎとるほど強引だったそうだ。うっかりすると金齒まで抜かれそうだったというから、恨みを買っていたにちがいない。犯人は馴染客かも知れん。とにかく、マダムの店の隣では何か知っていますよ。そこはブラック建てで、板仕切り一枚の隣の店へ何もかも筒抜けに聞える。その晩も、何か聞えたはずだ。わたしは出かけて行って調べてみるつもりですよ」

牧氏は「こちらで調査したところでは」と言うが、マダムのことは私が牧氏に話したのである。私は秀二がいた工員寮の若い人たちから、マダムのことや板仕切り一枚のことなどを聞いたのだ。牧氏は私の話に自分の意見を加え、煮ても焼いても食えない女というように色づけして話した。その舌はよく滑り、利用できることはすぐその舌に乗せ、自分だけが知っている話のようにしてしまふのだった。

そんなふうでありながら、私は牧氏の言葉で救われたような気持だった。真犯人は秀二ではないと聞きさえすれば、ただそれだけで私は心が安まるのだ。黒瀬はそわそわし、牧氏の話のところどころで私に頷いてみせたりした。殊に秀二を白だと牧氏が言ったとき、黒瀬は

じつとしていられなくなり、吸い馴れない煙草を私からもらって火をつけたりした。

「非常に心強いです。一生、恩にきます。わたしは、なんといいか、口では言えないほどで……」

黒瀬のその言葉の重さを私は量ることが出来た。黒瀬はこの事件で破滅の瀬戸際に立たされていると思ひこんでいるのだった。

そのとき牧氏は、思ひがけないことを言い出した。

「ちょっと耳にしたことだが、その晩、マダムの店の裏口で、二度、足音がしたというのですね」

「二度？」

と黒瀬は息をのみ、飛びつくように言った。

牧氏の話によれば、一度は秀二の立ち去った足音で、それから五分とたたずまた足音がしたというのだった。二度目の足音はひそかで、ほとんど聞きとりにくいほどだったが、マダムの店へはいった。その二度目の足音が犯人だったろうと牧氏は言うのだ。

「警察は、それを調べないのですか。何をぐずぐずしているのですか。それこそ、ほんとう

の最後の客だ」

「もちろん、調べていますな。二度目の足音のことは、警察でわたしは聞いたのだから……。お父さん、元気を出すことですよ。こんな事件では、最後のところまで気落ちは禁物だ。当人を信じてやりなさい。わたしには、ちゃんと勘定をすませてマダムのお店を出たと言っている」

牧氏のその足音の話は重大で、私は不意に光が射しかけてきたような気がした。それにしても牧氏は事もなげに言い、唐突すぎる気がするのだった。私は手放して喜ぶことが出来ず、かえって不安になった。そんな依頼人の愚かさを牧氏のきらめくような眼が喜び、楽しんでるように思われた。溺れるものの藁で、すぐ飛びついて行く黒瀬と私の卑屈さを牧氏は見とったように、唇の隅をひきつらせる笑いかたをした。牧氏は決して人といっしょに笑わず、自分だけでこっそり笑うのである。

しかし私は、牧氏にこの上もなく魅力を感じているのだ。牧氏はこの事件について力があがり、その力を振うことが出来るのだと思う魅力であった。私は卑屈なほど機嫌をとらないではいられない。